



TITLE:

京大広報 No. 547

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

---

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 547. 京大広報 2000, 547: 895-908

ISSUE DATE:

2000-06

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/196561>

RIGHT:



# 京大広報

No. 547

2000.6



農学研究科附属演習林公開講座風景

関連記事本文908ページ

## 目次

国家公務員倫理法等の施行にあたって .....	896
大学の動き	
京都大学における国際交流の在り方について ...	896
日誌 .....	899
栄誉	
竹原善一郎名誉教授、谷  嘉明名誉教授が	
紫綬褒章を受章 .....	899
中西重忠生命科学研究所教授が	
米国科学アカデミー外国人会員に選ばれる ...	901
随想	
偶然接した時代    名誉教授  岩崎又衛 .....	901
洛書	
デフォルメと簡単化                前田達明 .....	902

訃報 .....	903
資料	
平成12年度京都大学職員研修実施計画 .....	904
公開講座	
工学部公開講座	
21世紀の社会と工学 .....	905
理学研究科数学教室公開講座	
現代数学展望 .....	906
数理解析研究所数学入門公開講座 .....	907
農学研究科附属演習林公開講座	
森のしくみと働き  芦生演習林への招待 ...	908

## 国家公務員倫理法等の施行にあたって

総 長（倫理管理官） 長 尾 真

ご承知のように、このたび国家公務員倫理法（平成11年法律第129号）および国家公務員倫理規程（平成12年政令第101号）が制定され、本年4月1日から施行されました。

この法律等は、近年の国家公務員の憂慮すべき不祥事を契機として、職務の執行の公正さに対する国民の疑惑や不信を招くような行為の防止を図り、公務に対する国民の信頼を確保することを目的とするものであります。

この法律等では、職員の職務に利害関係を有する者からの贈与等の禁止等、職員の遵守事項が定められ、これらの遵守事項に違反した場合には、懲戒処分の対象となるなど、厳しい制裁措置が執られることになっています。

この法律等の施行にあたり、本学としては、教職員の方々に、関係法律、規程、国家公務員倫理審査会が作成した国家公務員倫理規程の解説および倫理教本（パンフレット）を配布するとともに、その趣旨の周知に努めているところであります。

本学教職員の皆様におかれては、特に教育研究活動の特性などに鑑み、具体的事例の解釈に際しては、当面、困惑される向きもあろうかとも思われますが、あらかじめ所属部局の担当窓口で確認を行うなど、

不祥事発生の未然の防止に努められるよう希望いたします。

いずれにいたしましても、この法律等の施行の趣旨をご理解のうえ、いやしくも国民の疑惑や不信を招くような行為が生ずることのないようお願いする次第であります。

（参考1）倫理管理官とは、「倫理規程」の規定に基づき、倫理監督官（文部事務次官）の職務の一部（①利害関係者と共に自己の費用を負担して飲食する場合の許可、②利害関係者からの依頼に応じて報酬を受けて講演等を行う場合の許可、など）を行うものであり、本学にあつては総長が指定されています。

（参考2）国家公務員倫理法（平成11年法律第129号）および国家公務員倫理規程（平成12年政令第101号）は、京都大学ホームページの学内掲示板（<http://www.adm.kyoto-u.ac.jp/Official/board/>）に掲載されています。

## 大学の動き

### 京都大学における国際交流の在り方について

昨年9月来、本学における国際交流の在り方について国際交流委員会にご審議いただきましたが、このたび、審議結果の報告がありましたので、ここに、報告書要旨を掲載して広くお知らせします。

なお、全文についてはホームページ（<http://www.adm.kyoto-u.ac.jp/kokuryu/arikata>）をご参照ください。

この報告書には、今後、5年から10年の中長期的展望にたつて、本学が大学として国際交流に対してどのように取り組んでいくべきかの基本方針につい

てとりまとめられております。大学における国際交流は今後ますます重要になっていくと認識しており、報告書の提言の実施に向かってさらに検討を進めていく所存ですので、皆様のご理解とご協力をお願いいたします。

この報告にいたるまでに払われた同委員会各位のご尽力に謝意を表します。

平成12年5月17日

京都大学総長 長 尾 真

平成12年 3月30日

京都大学総長  
長 尾 真 殿

国際交流委員会委員長  
鈴 木 健二郎

### 京都大学における国際交流の 在り方について（報告）

国際交流委員会では、平成11年9月27日付にて検討するよう要請いただきました京都大学における国際交流の在り方につきまして、今後5年から10年の中長期的な本学における国際交流をどのように進めたらよいのか、その基本方針あるいは大枠を設定し、実施可能な国際交流事業に関し提言できるように審議を重ねて参りました。

このたび、審議を終了致しましたので、その結果をご報告申し上げます。

### 京都大学における国際交流の 在り方について（要旨）

国際交流委員会では、長尾 真総長から「京都大学における国際交流の在り方について」検討の要請を受けて以来、今後5年から10年のスパンで本学における国際交流をどのように進めたらよいのか、その基本方針あるいは大枠を設定し、実施可能な国際交流事業を検討するために審議してきたが、ここに一応の結論を得たので、報告を行うものである。

この報告では、はじめに第1章で、京都大学における国際交流の基本理念を明らかにするとともに、国際交流の現状をふまえて、今後の基本方針を設定している。続いてこの基本方針にもとづいて、教職員の国際交流（第2章）、学生の国際交流（第3章）、国際交流の組織と施設設備（第4章）、国際交流と広報活動（第5章）、国際交流の財源（第6章）の各分野に関する提言をまとめている。京都大学における国際交流の基本理念と現状をふまえた今後の基本方針、各分野の主要な提言は次のとおりである。

●大学における国際交流の目的は、端的にいえば「相互の利益の増進」である。すなわち、国際交流は、個人としては情報の迅速な交換、大学としては研究・教育活動の活性化、また、国としては国際協力の推進や知日的知識人の養成などの利益を享受するために行われる活動である。京都大学が組織として行う国際交流では、本学にふさわしい交流を重点的に推進し、全体として本学の各分野における研究・教育活動の活性化を導き出す「先の尖った国際交流」を長期的な展望に立って計画的に実施する必要がある。

外国人研究者や本学で学習、研究する留学生の活動が、京都大学の学術活動の一部であり、本学の国際的評価にもつながる点で、その数を増大するとともに、質を高めることは重要である。本学学生の海外派遣はきわめて少数に留まっており、豊かな国際的感覚と資質をもつ人材の育成はできていない。この点は、京都大学が抜本的に取り組むべき課題である。かかる交流活動の有効度を高めるには、構成員個々の招へい・受け入れ努力に加えて、本学がさらに一定の長期的展望に立つ組織的な交流努力を行うことが必要である。また、今後は情報ネットワークを用いる遠隔講義や共同研究などに力を入れる必要がある。

●教職員の国際交流（第2章）は（1）教職員の海外派遣、（2）外国人研究者の受け入れ、（3）大学の組織的な国際交流によって構成される。

教職員の海外派遣のうち、研究者の学術交流の改善で最も重要なのは、研究者の主体的な学術交流をいっそう促進するとともに、国際交流の総合的推進のために、大学間の組織的な交流を発展させることである。

事務職員の海外研修では、豊かな国際的感覚や資質をもつ職員の裾野を組織的に拡大するために、長期的計画の下に事務職員の短期海外派遣など、京都大学独自の海外研修制度を確立する必要がある。

外国人研究者の受け入れは、現状では主として個々の研究者ベースで行われているが、本学が今後なすべきことは、全学的な研究者受け入れ体制の強化と本学にとって特色のある共同研究の重点的な支援である。



大学の組織的な国際交流の推進は、本学における今後の国際交流にとって非常に重要である。当面の具体的な課題として、国際的大学連合組織の積極的活用があり、なかでも重要なのは本学学生の短期留学の促進である。

●学生の国際交流（第3章）は（1）留学生の受け入れ、（2）学生の海外留学に大きく分けられる。

留学生の受け入れについては、留学生の高質化と数的な拡大を図るために、大学・部局・教員レベルで支給する奨学金制度の設置と、留学生が母国滞在中に入学許可を出し得る方法の工夫・開発が望まれる。また留学生生活の改善では、留学生用宿舍の拡充による居住環境の整備、学内外の協力による留学生基金の創設、各種の留学生支援組織の構築が強く望まれる。

学生の海外留学を推進することは、本学にとって緊急に解決すべき重要な課題である。そのための抜本的な改革として、海外留学を推奨するための honor 制度の創設や広報活動の充実、海外派遣の経費的な支援枠の拡大が必要である。また、海外留学が卒業のために不利にならないように、柔軟に運用できる単位の互換制度の整備やセメスター制の導入など、全学的な制度の改善も必要である。さらに、留学に必要な実用外国語（ヒヤリング、自己表現法）教育の強化と外国語による授業科目の増加も望まれる。

●国際交流の組織と施設設備（第4章）で取り上げたのは、（1）国際交流委員会、（2）留学生センター、（3）国際交流会館、（4）京都大学の国外拠点の設置、（5）国際交流に係わる事務組織である。

国際交流委員会は、その担当業務が膨大であるにもかかわらず、学内のサービス委員会の一つという位置づけになっており、大学の国際交流活動を積極的にリードするまでには至っていなかった。しかし、京都大学が今後国際交流を組織的に展開するためには、各部局に不参加の権利を留保する点で部局自治を保証しつつも、委員会自体を限定的な企画・執行権限を有する別組織へ変革し、大学としての組織的な国際交流の推進基盤とすることが必要となろう。

留学生センターにとって、発足以来の最大の問題

はスペースの不足であり、施設設備の早急な拡充、整備が強く求められている。また各部局と緊密に連携して教育・生活指導を行うために、語学スタッフや生活指導の専門スタッフを強化する必要がある。将来的には、現在の留学生センターを核として、留学生の教育支援機能や若手外国人研究者の研究支援機能などをもった国際交流センター的な全学組織を新たに構築することが望まれる。

国際交流会館については、外国人研究者や留学生用の宿舍が著しく不足しているため、将来的には、国際交流会館の大幅な拡充が必要である。

本学では現在、東南アジア研究センターがバンコック市とジャカルタ市に連絡事務所を設けているが、北米とヨーロッパにも、こうした国外拠点を設けることは、今後の国際交流の展開にとって重要である。

国際交流に係わる事務組織の改革課題としてとくに重要なのは、事務体制の一元化（再編成）と国際的感覚や資質を有する事務職員の養成である。事務体制の一元化については、平成12年4月から研究協力課、国際交流課および留学生課から構成される研究協力部が新たに発足するので、国際交流関係の施策が一貫性をもって実施されることが期待されている。また、国際的感覚や資質を有する事務職員の養成のためには、多数の事務職員が国内研修と同様に、現在の業務に関連する事項について海外の大学等で研修する短期研修制度を早急に確立するなど、職員研修を計画的に実施する学内体制を整備する必要がある。

●国際交流と広報活動（第5章）については、本学の総合大学としての特質をふまえて、横断的で開放的なメディア環境の提供、参加を誘発する新鮮な発信、京都大学自体の国際化の推進、成果の定着と累積の保障、国外での広報活動の展開を実質的に図る方向で改善することが要請されている。

●国際交流の財源（第6章）については、本学が国際交流を今後さらに推進していくために、その経費が十分に確保されなければならない。とくに重要なのは、長期の展望に立った計画的な国際交流の経費を充実することである。国際交流委員会では、そう

した財源の一つとして、財団法人京都大学教育研究振興財団の協力の下に、助成事業の一環として「京都大学全学国際交流経費」を設けることを提案した

い。これは主として、学術交流協定を締結した大学や今後協定を締結すべき大学と密接な交流関係を確立し維持するために必要な経費である。

## 日誌 2000.4.1 ~ 4.30

4月4日 評議会

6日 名誉教授称号授与式

〃 退官教授懇談会

7日 医療技術短期大学部名誉教授称号授与式

〃 医療技術短期大学部入学式

11日 学部入学式

〃 大学院入学式

18日 教育課程委員会

18日 保健衛生委員会

19日 国際交流委員会

〃 国際交流会館委員会

21日 同和・人権問題委員会

26日 環境保全委員会

27日 カナダ トロント大学 Heather

MUNROE-BLUM 副学長来学，総長及び関係教官と懇談

## 栄誉

### 竹原善一郎名誉教授，谷 嘉明名誉教授が紫綬褒章を受章

我が国学術の向上発展のため顕著な功績を挙げたことにより，竹原善一郎名誉教授，谷 嘉明名誉教授が，平成12年4月29日に紫綬褒章を受章されました。

以下に両名誉教授の略歴，業績等を紹介します。

竹原善一郎名誉教授は，昭和30年京都大学工学部工業化学科卒業，同大学大学院工学研究科博士課程を経て，同36年京都大学工学部助手，京都大学工業教員養成所助教授，京都大学工学部助教授，同58年教授に就任，工業化学科工業電気化学講座を担任された。工学部の改組により大学院工学研究科に配置換えとなり，物質エネルギー化学専攻基礎エネルギー化学講座工業電気化学分野を担任された。この間，平成6年より環境保全センター長を兼務し，同8年停年により退官され，京都大学名誉教授の称号を受けられた。本学退官後は，平成9年から関西大学工学部化学工学科教授となり，今日に至っている。



同名誉教授は，電気化学，無機合成化学，プラズマ化学，エネルギー化学の広い分野にわたる研究に多大の貢献をされ，なかでも一次・二次電池の開発と反応機構の解明，燃料電池の基礎研究，電気化学的エネルギー変換のための機能性材料作製とその基礎物性，電気化学的プロセスの化学反応への応用に関する研究成果は，国際的にも極めて高い評価を得ている。特に，電池が未だ経験を基に製造されていた40年も前から反応論に立脚した基礎研究の必要性を主張して先駆的な研究を進め，電池の改良や新型電池の開発に大きく貢献し，我が国が圧倒的に世界をリードしている高性能二次電池開発の基礎を築かれた。また，電子の移動を伴う化学反応を短絡した電池の中での反応と考え，水を電気エネルギーに熱や光のエネルギーを加えて分解させる方法を提案

し、太陽エネルギー有効利用に対する画期的方法として注目された。さらに、次世代の電池、燃料電池に不可欠な固体イオニクス薄膜材料を低温プラズマ雰囲気での電解反応により合成する方法、電池の中で化学反応を進め、物質生産時に放出されるエネルギーを電力として回収する方法等を新しく提案された。

これらの一連の研究業績に対して、昭和38年佐野進歩賞、同46年棚橋論文賞、平成元年電気化学会賞武井賞、同5年日本化学会賞を受けられた。

また同名誉教授は、通商産業省産業技術審議会臨時委員、同審議会エネルギー・環境技術部会電力等輸送・貯蔵技術分科会長、文部省学術審議会専門委員など各省庁の各種委員の役職を兼務してこられた。また、電気化学協会（現電気化学会）会長、同協会関西支部長、同協会電池技術委員長、日本化学会近畿支部長などを歴任し、さらに国際的にも、米電気化学会電池部会幹事、リチウム電池国際会議組織委員長などを務められている。

（大学院工学研究科）

谷 嘉明名誉教授は、昭和34年大阪歯科大学を卒業、同36年京都大学保健診療所助手となり、同47年京都大学医学部講師、助教授、医用高分子研究センター助教授を経て、同63年同研究センター教授、平成2年4月医学部教授、同年6月生体医療工学研究センター設置に伴い、同研究センター教授に就任し、生体材料学研究部門を担当された。また、平成4年より2期4年間にわたり生体医療工学研究センター長・京都大学評議員を務め、平成10年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。本学退官後は、東亜大学教授として引き続き後進の育成に尽力されている。



同名誉教授は、主として歯科生体材料の研究に一貫して従事され、絶えず臨床の視点から考察して、いわば臨床材料学とも云うべき新しい分野の確立に貢献された。すなわち、バイオマテリアルとして最も古くから生体に応用されている歯科修復材料の開発研究と物性評価、それに引き続き臨床応用研究である。まず、歯科修復材料を単に歯牙硬組織の欠損部位を充填して解剖学的形態を回復させるに止まらず、修復材料に齶触予防効果や接着性といった機能性を賦与することに着目し、歯科用アマルガムへのフッ化物添加を試み、それによる二次齶触予防効果の発現することを明らかにされた。これはヨーロッパでも注目され、わが国とフランスで製品化された。さらに歯科用接着材として広く用いられているポリカルボキシレート・セメントへのフッ化物添加を試

みられ、物性が改善されるほか、歯質への接着性が著しく向上することを明らかにされた。

続いて同名誉教授は、無機・有機複合材料の研究を進められ、主として歯科用コンポジットレジン修復材の新開発や改良研究を展開された。とくに昭和58年に開発した新規のコンポジットレジン修復材はフィラーとしてサブミクロン・サイズのシリカ・チタニア複合酸化物球状粒子が充填されており、力学的特性や光学的特性に優れた修復材として世界的に注目され、現在広く臨床に応用されている。さらに当時としては至難であったゾル・ゲル反応を用いて、シリカ・ジルコニア複合酸化物球状粒子をフィラーに用いた新しい修復材へと発展させた。

これら一連の研究業績に対し、昭和52年日本歯科材料器械学会賞、平成4年日本バイオマテリアル学会賞、同10年日本歯科理工学会賞、日本バイオマテリアル学会バイオマテリアル科学功績賞、同12年世界バイオマテリアル学会インターナショナル・フェロー等を受けられた。

（再生医科学研究所）



## 中西重忠生命科学研究科教授が米国科学アカデミー外国人会員に選ばれる

中西重忠生命科学研究科教授が、2000年5月2日付けで米国科学アカデミー（National Academy of Sciences）の外国人会員に選ばれました。

米国科学アカデミーとは、1863年リンカーン大統領によって公認された民間科学諮問機関であり、その会員に選ばれることは米国の科学者・技術者にとって最大の栄誉とされています。現在、正会員1,843人、選挙権を持たない外国人会員320人が選出されています。

以下に同教授の略歴、業績等を紹介します。

中西重忠教授は、昭和41年京都大学医学部医学科卒業、同46年大学院医学研究科博士課程を修了、同46年から同49年米国国立衛生研究所（NIH）客員研究員を経て、同49年本学医学部医化学講座助教授、同56年医学部附属免疫研究施設教授、平成7年大学院医学研究科生体情報科学講座教授、同11年大学院生命科学研究科高次生命科学専攻認知情報学講座教授として、高次脳機能学分野を担当されている。



同教授は、神経伝達の基本的なメカニズムと脳神経機能の分子メカニズムを明らかにし、その研究業績は神経科学はもとより、生化学・分子生物学、生理学等の他の研究分野にも大きなインパクトを与え、国際的に高く評価されている。すなわち、同教授は痛みを伝達する神経ペプチドの生合成機構の全貌を明らかにするとともに、神経ペプチドの受容機構に研究を進め、遺伝子工学と電気生理学を組み合わせた独創的な手法を開発して、初めて神経ペプチド

の受容体の実体を明らかにされた。一方、同教授はグルタミン酸受容体を分子レベルで明らかにすることに成功し、本受容体は特徴ある一群の分子種からなるという神経伝達の機構を知る上で、基本となる事実を明らかにされた。さらに同教授は、神経伝達の分子メカニズムの解析を進めることによって、視覚系の明暗の識別機構、匂いの記憶の獲得機構、運動の制御機構等数多くの独創的な研究業績を挙げ、脳機能発現の分子メカニズムの解明に大きな貢献をされている。

これら一連の研究に対して、朝日賞（昭和58年）、武田医学賞（昭和62年）、井上學術賞ならびに中日文化賞（平成元年）、日経BP技術賞ならびにベルツ賞（平成3年）、上原賞（平成4年）、米国プリストル・マイヤーズ・スクイップ神経科学賞（平成7年）、東レ科学技術賞ならびに慶應医学賞（平成8年）、恩賜賞・日本学士院賞（平成9年）など多数の賞を受けられ、また、米国芸術・科学アカデミー外国人名誉会員（平成7年）にも選ばれている。

（大学院生命科学研究科）

## 随想

### 偶然接した時代

名誉教授 岩 崎 又 衛

数年前のことであるが、旅行に持って行くカメラのシャッターと巻取りとの連動が時々機能しなくなることに気付いた。この故障はなかなか直らないのではと危惧していたら、案の



定二回目の修理でも直らず、旅行に間に合わなくなった。店に無理を云ってカメラを借りることができたが、旅行中傷をつけないようにと気をを使うことになった。返却のとき、珍しく店内に誰もいなかった。そのせいかもしれない。壁の一隅に美しい和とじ書籍の額入り写真がかけてあることに初めて気が付い



た。和蘭字彙とある。出てきた若い女性店員に書籍の在処を聞くと、京都府立資料館にあると思う、と意外に明快な答が返ってきた。さらに、主人はこんなのが好きなのです、と付け加えた。このような古文書に接する機会はかつて無かったが、このやりとりで急に興味がわいてきた。府立資料館ならば我が家から比較的近い。早速確かめてみると、貴重書のリスト中に見つけることができた。

「和蘭字彙 侍医法眼 桂川甫周」の表書があった。邦文の部分には現在の自然科学で使われている用語があちこちに見られた。濃紺厚めの和紙の表紙、手書きと思われるペン字体など、手作りの感触を通して当時の世界に引き込まれる気分となった。永島大典氏の『蘭和英和辞書発達史』によれば安政五年（1858年）完成、十一万二千語収録、とのことである。安政五年は幕府が米国並びに欧州各国との通商条約締結に踏み切った年である。オランダ国との交流という状況が崩れ、蘭学の存在価値が無くなっていく時期である。この字彙も同じような運命を辿ったと思われる。これで終わりとするのも残念なので、もう少し年代を遡り、わが国最初の化学書、『宇田川榕庵の舎密開宗』（京都大学附属図書館所蔵）を見ることにした。上梓されたのは天保八年（1837年）、当時の欧州における化学に関する成果がそれほど遅れることなくよく伝えられている。新金属と云う章のなかのウランについての記事、さらに電気分解、フッ化水素酸など筆者に馴染み深い項目が目についた。文は簡潔で、用語の多くが現在も使われており、当時の化学の状況を容易に理解できて興味

深い。

丁度その頃、歌川広重の東海道五十三次の浮世絵展を見る機会があった。入口の解説では1837年の作とあり、舎密開宗の発行と同じ年なのである。そこに画かれているのは近代という枠から外れた世界であり、舎密開宗の内容と両立しにくい違和感のようなものを覚えた。しかし、明けとも夕べとも見える色調を背景に静かな時の流れを感じさせるものがあり、迫る変革を暗示しているように思えた。広重の五十三次は今日まで広く人々に親しまれ、江戸文化の最高傑作のひとつとして挙げることに異論はないであろう。一方、当時、舎密開宗の内容を理解し、重要性を認識しえたのは極く限られた層と思われる。しかし、全く未知の分野の翻訳を通じて邦文の表現の幅を広げ、その後の科学受け入れに重要な先駆的役割を果たしたとも考えられる。何れにしても、同じ時期に全く異なった分野でそれぞれ歴史に残る作品が世に出されたということは、この時代の文化面でのレベルの高さと層の厚さを示している。最近気付いたのであるが、1837年は天保の飢饉とそれに伴う社会的騒乱の時期にも相当する。この頃を境にして時代が近代に向けて変貌し始めたのではないかと勝手な想像をしている。

カメラの故障が奇縁となり、思いがけず上記時代を多少とも実感することができたことを有難く思っているが、さて、最近の状況は、と考えるときの参考にもなっている。

（いわさき またえ 元原子エネルギー研究所教授  
平成5年退官、専門は無機反応化学）

## 洛書

### デフォルメと簡単化

前 田 達 明

奈良、新薬師寺には、有名な十二神将像がある。幼い頃から祖母に手を引かれて、よくお参りし、“お友達”といった感覚で親しんできた。長じて、よく拝観してみると、なるほど、そのお顔は見事といえよう。しかし、首から下は、お世辞にも上出来とはいえず、何か“お添え物”の感が拭えない。もっと

も、考えてみれば、それで仏師の意図は十分に尽くされていて、この像達の価値を何ら減ずるものではない。それは、仏像とは、そもそも美術品ではなく、信仰の対象である。信者が拝むとき、その視線は、そのお顔に集中し、一心に念ずるわけである。したがって、仏師は頭部に全精力を注ぐ。そして、そこ

には、写実的な顔ではなく、仏としてのデフォルメされた顔が出現する。他は簡単に造っても目的は十分に達せられる。

実は、このデフォルメと簡単化ということは、日本文化の特徴ではないかと推測している。例えば、日本では、習い事をするとき、「型から入れ」といわれる。この型とは、重要なところをデフォルメし枝葉末節は簡単化したものである。そして、これを用いれば、物事を早く容易に習熟し得るからである。そして、人の話によれば、日本人は、とにかく、この「型」が好きで、例えば、日本人ほど「血液型」で人を判別するのが好きな民族はいない、との事である。

さらに、日本文化には「見立て」ということが盛んである。茶道や料理は勿論、例えば、能狂言で「鬘桶」と呼ばれる小道具は、椅子に見立てたり、酒樽に見立てたり、といった具合である。すなわち、物のある特徴をデフォルメして、他の差異を簡単化して、本物と見立てるわけである。これは、勿論“御趣向”ではあるが、考えてみれば、本物以外の物で

間に合わせているわけである。また、デフォルメと簡単化は、日本の工業製品にもみられる。その極致として、例えば日本の代表的戦闘機「ゼロ戦」は、軽量化を図り、戦闘能力を高めることにのみ設計された、といわれている。そして、戦後の日本社会では、よくいわれるように、「利潤追及第一」で他は簡単化され、多くの公害を生んだ。

このデフォルメと簡単化の根源は、結局、日本人が、その能力以上のことをしようとするにあるのではなからうか。何故、日本人は能力以上のことをしようとするのか。それは、中国（唐）や欧米といった強大国に負けまいと虚勢を張って生きてきた結果ではなからうか。すなわち、歴史が示すように、常に大国の脅威のなかに生存している小帝国日本の“生き様”ではないだろうか。

遣唐使廃止や鎖国は、そのストレスからの逃避だったのかもしれない。そうはしなくても、もう少し、肩の力を抜いて生きられないものだろうか。

（まえだ たつあき 大学院法学研究科教授）

## 訃報

このたび、<sup>あべたくや</sup>安部琢哉生態学研究センター教授、<sup>ひがし まさひこ</sup>東正彦生態学研究センター教授が逝去されました。ここに、謹んで哀悼の意を表します。

以下に両教授の略歴、業績等を紹介します。

### 安部 琢哉 生態学研究センター教授



生態学研究センター教授安部琢哉先生は、メキシコのカリフォルニア湾で水難事故のため、3月28日（現地時間3月27日）逝去された。享年55。

先生は、昭和42年に京都大学理学部を卒業し、同大学院理学研究科博士課程を経て、琉球大学理工学部助手、同助教授、京都大学理学部助教授、平成3年生態学研究センター教授に就任、生態進化研究部門を担任された。

先生は、熱帯生態系におけるシロアリの物質循環

における役割に関する研究とシロアリの生態学的・進化学的研究で大きな業績を残された。センター教授に就任後も、海外の研究者と積極的にシロアリに関する共同研究を企画し、アフリカ、タイ、マレーシア、オーストラリアに野外ステーションを置き調査研究を行う一方、大学院学生の教育研究の指導に取り組まれた。その成果は、動物生態学の分野のみならず、広く生態学全体の発展に大きく貢献している。主な編著に『シロアリの生態』、*Structure and Function of Soil Communities*、*Biodiversity, An Ecological Perspective* などがある。

また、先生は、日本生態学会全国委員、同英文誌編集委員長、日本熱帯生態学会評議員、日本学術振

興会科学研究費委員会専門委員，日本学術会議 I G B P 専門委員会 G C T E 小委員会委員，環境庁総合的環境指標検討会委員，琉球大学熱帯生物圏研究セ

ンター運営委員など，学外でも広く活躍された。

(生態学研究センター)

## 東 正彦 生態学研究センター教授



生態学研究センター教授東正彦先生は，メキシコのカリフォルニア湾で水難事故のため，3月28日（現地時間3月27日）逝去された。享年45。

先生は，昭和53年京都大学理学部を卒業し，同大学院理学研究科修士課程，米国ニューヨーク州立大学大学院博士課程修了，同州立大学研究助手，ジョージア大学研究員，龍谷大学理工学部講師，同助教授，京都大学生態学研究センター助教授を経て，平成6年同教授に就任，温帯生態研究部門を担当された。

先生は，ジョージア大学で，生態系におけるエネルギー・物質動態の構造解析の新しい数理的手法を開発し，食物網・栄養動態の理論，間接効果の理論

へ応用された。帰国後は，システム生態学と進化生態学の理論研究を続け，「血縁者間のコンフリクトの共進化ゲームによる解消」の一般理論，最適グループサイズに関する統合理論等を発表された。さらに，「なぜすべてのシロアリ種に真の（不妊の）ワーカー・カーストがないのか」という社会性進化の問題に一つの答えを出された。また，「C-Nバランス」というアイデアを考え出し，シロアリ共生系の生態・進化に関する理論研究に適用された。最近では，相互作用ネットワークを伝播する間接効果が複雑なシステム反応をもたらす機構に関する一般理論を開拓するとともに，性選択による同所的種分化の理論を『ネイチャー』に発表された。

また，文部省学術調査官として日本の科学研究の発展に貢献され，平成13年度に予定されている国立総合地球環境学研究所の設立にも努力された。

(生態学研究センター)

## 資料

### 平成12年度京都大学職員研修実施計画

平成12年度における研修実施計画は，次のとおりです。

なお，「新採用職員研修」「主任研修」等には放送大学の授業科目を取り入れて実施します。

研修の名称	実施時期	対象	予定人員	研修場所	備考
新採用職員研修	4/10～4/13（4日間）	新採用職員（他機関を含む）	55	国立若狭湾少年自然の家	
主任研修	9/5～9/8（4日間）	主任（他機関を含む）	60	〃	
係長研修	11/7～11/10（4日間）	係長（他機関を含む）	40	国立曽爾少年自然の家	
課長補佐級研修	9月（3日間）	課長補佐，事務長補佐，室長補佐，専門員	30	京大会館	
技術職員研修（第24回）	7/12～7/14（3日間）	行（教室系技術職員（他機関を含む）	50	京大会館ほか	
〃（第25回）	2/21～2/23（3日間）	〃	50	〃	
語学研修（英語・初級コース）	5/9～7/14（55時間）	事務系・技術系職員	16	工学部国際交流室	週2回午後1回3時間
〃（英語・中級コース）	10/6～12/15（55時間）	事務職員	8	〃	週2回午後1回3時間
〃（中国語・初級コース）	未定（後期）	〃	8	〃	
新採用職員研修（Ⅱ）	4/19～4/20（2日間）	新採用職員	39	附属図書館調査室	
初任者教育研修（前期）	5月～9月（18回）	〃	17	附属図書館調査室ほか	毎週水曜日午後基本
初任者教育研修（後期）	10月～2月（18回）	〃	13	〃	〃
実務講習会（庶務系）	12月初旬（4日間）	実務担当職員	延べ300	京大会館	
〃（経理系）	10月下旬（4日間）	〃	延べ200	〃	
〃（教務系）	10月下旬（2日間）	〃	延べ80	〃	
民間派遣研修	9月予定（1カ月）	掛長，専門職員	2	民間会社等（場所未定）	

## 公開講座

## 工 学 部 公 開 講 座

## 21世紀の社会と工学

工学部では、来る6月24日、7月1日の各土曜日に、広く一般市民を対象とする「京都大学工学部公開講座」を下記のとおり開催します。

## 記

6月24日(土) 13:30~16:30

デジタルシティの現状

バイオマイクロマシン

石 田 亨 教 授

鷲 津 正 夫 教 授

7月1日(土) 13:30~16:30

21世紀の持続可能社会をどう描くか

循環型社会形成と環境残留性の化学物質コントロール

内 藤 正 明 教 授

酒 井 伸 一 助教授

会 場：京都大学工学部物理系校舎（京都市左京区吉田本町）

自家用車での来場はご遠慮ください。

定 員：150人

受 講 料：4,500円（テキスト代及び消費税を含む2日間分）

申込方法：6月22日（木）までに現金書留又は受講料持参によりお申し込みください。

（定員に余裕があれば、当日会場にて受付可。）

現金書留の場合は、以下のものを同封してください。

受講料

連絡先等を明記した用紙（〒、住所、氏名、年齢、職業、電話番号）

なお、複数人で申し込む場合は1人1枚。

返信用封筒（宛名を明記し、80円切手を貼ってください。）

受講証、領収証、会場案内図等をお送りします。

受講料持参で申し込む場合の受付時間：平日午前10時から午後3時（正午から午後1時を除く）

問い合わせ・申込先：〒606-8501 京都市左京区吉田本町

京都大学工学部等総務課庶務掛公開講座係

（工学部8号館1階西側）

TEL 075-753-5005, 5006 FAX 075-753-5065



## 理学研究科数学教室公開講座

## 現 代 数 学 展 望

本数学教室では、以下の要領で公開講座を開催します。興味をお持ちの方はお申し込みください。

## 記

## 1. 趣 旨

数学の近年の発展は著しく、数理科学、技術との関係も深まり、数学教育にも大きな影響を与えている。この情勢に鑑み、数学教育関係者をはじめ現代数学に興味のある大学生、高校生に対して、数学の最近の発展についての展望を与えるために本講座を開講します。

聴講者は、ある程度の数学の素養のある方が望ましいが、講義では、その内容を理解するために必要な基礎的なことについても解説します。

2. 期 間 7月24日(月)から7月26日(水)

3. 時 間 各 日(3日間共)10:00~17:00

4. 場 所 京都大学大学院理学研究科数学教室第3講義室(1階南側)

5. 応募資格 数学教育関係者及び現代数学に興味のある高校生以上の方

6. 定 員 50人(定員を超過した場合は抽選)

7. 受 講 料 7,500円(講座開催初日に受付へ納付してください)

## 8. 申込方法

期 間 6月1日~6月30日

手 続 官製往復ハガキに次の事項を明記してください(申込みは1人につき1枚)

①氏名 ②住所・電話番号 ③年齢・性別 ④勤務先又は学校名 ⑤受講目的  
返信ハガキ宛名にも住所・氏名を記入してください。

郵 送 先 〒606-8502 京都市左京区北白川追分町

京都大学大学院理学研究科数学教室「公開講座」係

## 講師及び内容

## 1. 微積分の偉力

教授 井川 満

今から約300年前に、ニュートンとライプニッツによって創始された微積分学は、数学や物理をはじめとする科学の多くの分野で偉大な役割を果たしてきた。

今回の講座においては、「微積分学の基本定理」を出発点として、微積分学の偉力をいくつかの具体的な問題を考えながら実感することを目指す。

## 2. 複素数の不思議

教授 上野 健爾

複素数は、現代の科学・技術文明においてなくてはならない数であるのに、虚数という名前に惑わされて、多くの人が実在の数ではないと信じている。

本講義では、複素数が導入されて数学がどのように豊かになったか、また複素数はどこでどのように活躍しているかを解説する。

## 3. 大きな数

助手 原田 雅名

古代のインド人は、ガンジス河の砂粒は数えきれないほど多いと信じていた。アルキメデスは、宇宙を砂で埋め尽くすと何粒ほどかが計算できることを示した。現代人は、それよりはるかに大きな数を日常的に取り扱っている。

## 数理解析研究所数学入門公開講座

本研究所では、下記の要領で公開講座を開催いたしますので、興味のある方はお申込みください。

記

1. 趣 旨 数学はあらゆる科学の基礎をなすものです。今回の公開講座では、社会人、中・高校教師、大学生等ある程度数学的素養のある一般人を対象に、専門的題材をわかりやすく解説しようとするものです。
2. 期 間 7月31日(月)～8月4日(金)
3. 時 間 毎日午前10時30分～午後4時
4. 場 所 京都大学数理解析研究所4階大講演室
5. 定 員 120人(先着順)
6. 受講料 7,500円(テキスト代を含め全講義を通しての受講料で消費税を含みます。)  
(受講決定通知後に受講料を納入願います。)
7. 申込方法  
受付期間: 6月5日(金)～7月7日(金)午後5時(必着)  
手 続: 官製往復ハガキまたはFAX(1名につき1枚限り、複数枚の応募は無効)に  
①氏名 ②住所(電話番号も記入のこと) ③年齢  
④職業(大学 回生, 高校数学担当教員, 主婦など) ⑤申し込みの動機  
を明記のうえ下記あてにお申し込みください。なお、返信ハガキは採否の通知に用いますので、必ず郵便番号・住所・氏名を記入してください。  
〒606-8502 京都市左京区北白川追分町  
京都大学数理解析研究所「数学入門公開講座」係  
電話 075-753-7202 FAX 075-753-7272

### 講師及び内容

1. 球面の対称性 助手 永田 雅嗣  
「対称性」というのは、実生活にもなじみの深い概念です。「球面という図形にどんな対称性があるか」と問われれば、誰でも点対称、回転対称、面对称などのアイデアを思い起こすでしょう。  
では、点対称や面对称が必ず周期2の対称性であるのは、なぜでしょうか。「周期3の点対称」のようなものがありえないことの理由をつきつめて考えていくと、図形のグローバルな性質をつかさどる、美しい数学が見えてきます。図形の定性的な性質と、定量的な群論とを結び、変換群論と呼ばれる幾何理論を紹介したいと思います。
2. 有理点の問題と符号暗号への応用について 教授 伊原 康隆  
代数曲線の有理点が符号、暗号(主に符号)の問題にどのように使われるかについて、入門的な話をしたいと思います。  
体、とくに有限体とは何か(?)といったあたりから話をはじめ、代数曲線とその有理点、楕円曲線の場合、等についての基礎的な話をし、それらが符号、暗号に関する如何なる問題にどう応用されるかについて、その一端を紹介したいと思います。
3. 離散と連続 - 微分方程式の数値解析 助手 降旗 大介  
「数えられるもの = 離散量」と「数えられないもの = 連続量」という素朴な感覚にたがわず、数学では離散量と連続量は異なった扱いを受けます。  
しかし、離散と連続の間には、連続は離散の極限であるという直感を越えて微妙で意義深い関係があるらしいことが各分野の様々な結果によって強く示唆されていて、非常に興味深いものがあります。  
本講座では、そうした離散と連続の関係の一端を紹介するべく、離散量を対象としアルゴリズムの構築と計算量の解析を柱とする計算機科学と、連続量を対象とし関数空間の解析を柱とする関数解析学とが合流する分野 - 微分方程式の数値解析 - を中心に講演を行います。

## 農学研究科附属演習林公開講座

### 森のしくみと働き 芦生演習林への招待

農学研究科附属演習林では、森林に関する理解を深めていただく機会のひとつとして、芦生演習林において、昨年に引き続き一般の方々を対象とした講座を開講します。

芦生演習林の自然とそのしくみや森林を利用する方法等を講義し、解説したいと考えています。多数の方々の参加を歓迎いたします。

#### プ ロ グ ラ ム

8月2日(水)	芦生の自然について(講義)				
	開講挨拶	演習林長	渡	辺	弘之
	芦生演習林の概要	講 師	中	島	皇
	京都近辺の山に生える漢方薬とその効用	高尾病院長	江	部	洋一郎
	森林認証(FSC)と持続可能な森林管理(SFM)	助 教 授	芝		正己
	芦生の樹木識別入門	技 官	登	尾	久嗣
8月3日(木)	天然林内での講義並びに実習(各班5人, 10班の編成で行います)				
	教 授	竹	内	典	之
	教 授	大	畠	誠	一
	助 教 授	安	藤		信
	助 教 授	柴	田	昌	三
	助 教 授	芝		正	己
	講 師	中	島		皇
	講 師	中	島		皇
	助 手	寄	元	道	徳
	助 手	濱	本	な	お
	助 手	中	西	麻	美
8月4日(金)	芦生の森と人(講義並びに実習)				
	講 師	中	島		皇
	教 授	大	畠	誠	一
	技 官	北	川	新	太郎
	閉講挨拶	演習林長	渡	辺	弘之
日 程	8月2日(水)午後1時~8月4日(金)正午(2泊3日)				
会 場	京都大学大学院農学研究科附属演習林芦生演習林 (京都府北桑田郡美山町芦生)				
交通手段	自家用車または路線バス				
定 員	50人(応募者多数の場合は抽選)				
受講料	7,500円(但し、宿泊費、交通費などは別途)				
申込方法	官製往復ハガキ(1人につき1枚)に住所、氏名、年齢、職業と連絡先(電話番号・FAX番号)、交通手段(自家用車または路線バス利用)を記入し、返信用ハガキに郵便番号、あて先を記入のうえ6月30日(金)《必着》までにお申込みください。				
申 込 先	〒606-8502 京都市左京区北白川追分町 京都大学農学部等教育・研究協力課研究協力掛宛 TEL(075)753-6411 FAX(075)753-6020 E-mail kenkyo11@mail.adm.kyoto-u.ac.jp				
そ の 他	詳細は申込先にお尋ねください。				

〔お断り〕

前号(546)に掲載しました「平成12年度入学試験諸統計」の記事の中で、890ページの工学部・農学部学科別内訳の農学部生産環境科学科の追加合格者数が2人となっておりましたが、これは、入学辞退者数2人の誤りでしたので、お詫びして訂正いたします。